

人間学を学ぶ月刊誌

[chichi]

致知

昭和51年8月16日 第三種郵便物認可
令和5年12月1日発行 毎月1回1日発行 通巻第582号

2024 January

①

作家

五木寛之 &

愛知専門尼僧堂堂頭

青山俊董

冒険家

三浦雄一郎

広島市信用組合理事 理事長

山本明弘 &

コンサルタント

遠藤功

〔特集〕

人生の大事



した味より売り上げを優先し、先代と苦業を共にした社員はいたにせよ少数派となり、幹部はイエスマンばかりになっていました。会社がおかしくなる要因は多々ありますが、最たるものは「創業の精神」を忘れてしまうことでしょう。

そこに追い打ちをかけたのが臨界事故です。以後も業績は上向かず、遂に二〇〇九年八月、民事再生の適用を申請。さらに翌月、百億円超の負債と粉飾決算が明らかになったのです。

くめ納豆がなくなる、誰かが何とかしなければ。破談が続く支援企業探しに私を駆り立てたのはこの思いでした。

最後は食酢業界最大の企業が名乗り出てくださり、執行役員になってくれた私が実質的な社長となって事業承継会社「金砂郷食品」が発足。くめ納豆ブランドの商標と営業権を売却し、再建計画が組みました。

その際、支援に反発する派閥も生まれ、「永田は売国奴だ」と糾弾を受け、二年後に



は東日本大震災で四か月の操業停止を強いられる幕開けでした。それでも貰ったことは、社内のお金の流れを役員から社員、パートさんまで包み隠さず月次の会議で発表する「オープンブック」です。過去見過ごしていた使途不明金を撲滅すると共に、曖昧だった数値目標を皆に明確に意識させる狙いがありました。その甲斐もあり、初年度で黒字を出し、債権者の皆様から随分感謝の言葉をいただきました。しかし、話はこちらで終わりません。五年半が経って支援期間が終わり、ブランドが譲り渡されると、たちまち赤字に転落。毎月「今月は二千万の赤字」「今月も一千万の赤字」

……と、キャッシュがすり減る現実を皆に発表し続ける時期が三十か月も続きました。その渦中、地元常陸太田市の倫理法人会に足繁く通い、ご縁を得たある方の言葉が胸に響きました。「努力しても報われない不条理はある。だから徳の貯金をするのだ。そこに波動が生まれる」。何事も波がある。だから悪い時に頑張る、いい時に楽をするのではなく、自分がやるべき仕事をやり続ける。それが必要な時に返ってくる。そんな折でした。かつて共に汗を流した他県の納豆メーカーの役員から、うちの商品の製造を請け負ってくれないかと依頼が舞い込み始めました。再建中の会社に仕事を出すなど経営者は渋るはずですが、私の仕事ぶりを信頼してくれた彼らが「永田さんがやっている会社なら間違いない」と証言してくれたのです。ここから経営は持ち直し、前身企業が育てた最上級の製法を用いたブランド「楽」が誕生。その味が営業マンとな

り、成城石井さん、ライフさんなど大手スーパーに並ぶ納豆の製造も任されるようになっていきました。

社業を守り育ててこられた根本は私の使命感、だけではありません。苦業を共にした従業員はもちろんのこと、前身企業の債権者のほぼ全員が、一銭も見返りを得られない例も多い民事再生に際してハンコを捺してくださいだった、返し難い恩があります。その原点を忘れてはならぬという思いで、私は当社の社是を「報恩感謝」と定めました。

この原点を忘れず、後進そしてパートナー企業とご縁を育て、地域にブランドを遺す。そうして強くて愛される会社ができるとき、私の役割は果たされたと言えるでしょう。（ながた・ゆきお 金砂郷食品代表）

美容で人の笑顔を
咲かせる

小池由貴子

「孫の誰かが美容師になってくれたら髪を切ってもらえる

のに……」

祖母の思いを受け、私は十九歳で美容師になりました。

祖母は原因不明の脱毛症で、普段はウィッグを被り、伸びた髪は自分で切る生活。冒頭の言葉を頻りに口にすることを果たしたいとの気持ちで、募らせていきました。

ある日、美容学校へ進学を決めた私に祖母は言いました。「私のように美容室に行けない人がいる。そういう人の力になれるような美容師になつてね」

そう言っておもむろにウィッグを外した祖母の姿を目にし、私は愕然としました。言葉に詰まりその場で頷くことしかできませんでしたが、いつか祖母の思いを形にしよう——心ではそう強く誓ったのでした。

美容学校を卒業後、アシスタントを経て美容師となり、十年が経ったある時のこと。勤務中に足に違和感を覚え、仕事が終わる頃には立てなくなっていました。翌日病院へ

